

令和7年度かながわ水源地域活性化計画フォローアップ会議 開催結果

1 会議名

かながわ水源地域活性化計画フォローアップ会議

2 開催日

令和8年2月26日(木) 14時30分～16時30分

3 会場

あつぎ市民交流プラザ ルーム502・503
(厚木市中町2丁目12-15)

4 議題

令和3～7年度「かながわ水源地域活性化計画」の取組状況について

5 報告

「かながわ水源地域活性化計画」の改定内容について

6 出席者等

別紙1のとおり

令和7年度かながわ水源地域活性化計画フォローアップ会議出席者名簿

(1) 委員

	氏名	御所属等	出欠
1	宮林 茂幸	東京農業大学名誉教授	出席
2	鷺尾 裕子	松蔭大学観光メディア文化学部客員教授	出席
3	佐藤 和仁	(一社)相模湖観光協会事務局長	欠席
4	石田 貴久	石田林商代表、かながわ水源地域の案内人(山北町)	出席
5	米田 博行	芳雅美術工芸代表、 かながわ水源地域の案内人(愛川町)	出席
6	岩澤 克美	NPO法人「結の樹 よってけし」理事長、 かながわ水源地域の案内人(清川村)	出席
7	志村 政浩	(公財)宮ヶ瀬ダム周辺振興財団常務理事	出席
8	長田 孝宏	相模原市緑区役所津久井まちづくりセンター所長	出席
9	野崎 昇司	相模原市緑区役所藤野まちづくりセンター所長	出席
10	和田 薫	山北町農林課長	代理出席 ^{※1}
11	上村 和彦	愛川町環境経済部商工観光課長	出席
12	朝倉 義則	清川村村づくり観光課長	出席

(2) アドバイザー

	氏名	御所属等	出欠
1	入江 彰昭	東京農業大学地域環境科学部教授	出席

(3) 事務局

	氏名	所属	出欠
1	今野 俊範	神奈川県政策局政策部土地水資源対策課長	代理出席 ^{※2}
2	松谷 尚彦	神奈川県県央地域県政総合センター企画調整部長	出席
3	久保内 顕	神奈川県県西地域県政総合センター企画調整部長	代理出席 ^{※3}

※1 長田 孝仁(山北町農林課農林振興班)が代理出席。

※2 石井 俊充(神奈川県政策局政策部土地水資源対策課副課長)が代理出席。

※3 二見 彰宏(神奈川県県西地域県政総合センター企画調整課主任主事)が代理出席。

令和7年度かながわ水源地域活性化計画フォローアップ会議 議事録

1 あいさつ等

(1) 事務局あいさつ（石井土地水資源対策課副課長）

神奈川県土地水資源対策課の副課長、石井と申します。

本日はご多忙の中、フォローアップ会議にご出席いただき、誠にありがとうございます。

皆様には、日頃より県の水源地域活性化事業にご理解とご協力を賜り、この場をお借りして深くお礼申し上げます。

このフォローアップ会議は、「かながわ水源地域活性化計画」に基づき実施される事業の効果検証を目的に開催するもので、書面開催も含めると今回で5回目となる。

昨年度のフォローアップ会議では、今年度末で期間が終了する現行計画のあり方について、皆様から貴重なご意見をいただいた。

そのご意見を踏まえ、県では「かながわ水源地域活性化計画」の改定について、案内人や地元市町村をはじめとする関係機関の皆様にご意見を伺いながら、より充実した計画となるよう、作業を進めてきた。

本日は、現行計画の期間である令和3年度から令和7年度までの取組状況に加え、「かながわ水源地域活性化計画」の改定案について、報告させていただく。

委員やアドバイザーの皆様には、今後実施する改定計画の事業に向けて、忌憚のないご意見をお聞かせいただきたい。

本日はどうぞよろしくお願いいたします。

(2) 委員紹介

委員及び事務局による自己紹介を行った。

(3) 議長あいさつ（宮林議長）

現行計画の最終段階のフォローアップ会議であるため、本日は忌憚のないご意見をいただきながら進めていきたいと思う。

2 議題

令和3～7年度「かながわ水源地域活性化計画」の取組状況について

「令和3～7年度「かながわ水源地域活性化計画」の取組状況について（資料1）」により、事務局から報告した後、質疑応答及び意見交換を行った。

[質疑応答及び意見交換]

（宮林議長）

計画期間中には新型コロナウイルスの流行があったが、多くの事業を実施してきた。

やまなみ五湖の認知度が低いことが課題である一方で、水源に対しての関心は高いと考える。神奈川県の水源がやまなみ五湖であることを結びつけて考えられる人が少ないのではないかと。

やまなみグッズは、評価は高いけれども、製品の出荷量の問題もあってたくさん市場に出すことができない。売り出す戦略を考えないと、売れていかないのではないかとと思う。

小中学校等交流事業については、参加学校が硬直化している中で、さらに学校自体が先細りしているような状況である。今後は、幼児教育まで含めて検討してはどうか。

それぞれの事業の効果はそれなりに出てきているが、マンパワーの問題や案内人の高齢化あるいはPR戦略などまだ課題がいくつかあると思う。

(鷺尾委員)

資料の中で、水や森を背景とした写真が多く、事業の活動の範囲が非常に広がった印象を受けた。

計画期間中に様々な広報物を作成したとの説明があったが、前回の計画から継続している取組と現行計画の期間中に新たに始めた取組の違いが分かりやすいとよかった。

水源シールは、現行計画の計画期間中に新たに始めた取組だと思われるが、水道、川及びやまなみ五湖という神奈川県中央部にある五つの湖が繋がっていることを子ども達に伝える一つのツールになったと思う。

令和6年度のやまなみグッズの新規認定品である「瓶々プリン」及び「茶々プリン」は資料の写真でも美味しそうで、美味しそうであることと売れているかは別問題であるが、非常に明るい報告が出てきたと感じる。

特に、かながわ水源地域の案内人（以下、「案内人」という。）が増えたことは非常に素晴らしく、今後に繋がるものだと思うので、案内人が増えた要因は知りたいと思う。

(宮林議長)

前回の計画から継続している取組と現行計画の期間中に新たに始めた取組の違いが分かるようにしたほうがよいというのは、同意見である。

米田委員は実際に案内人として活動されているが、鷺尾委員がおっしゃった案内人の増加について何かありますか。

(米田委員)

案内人が増えた要因として、愛川町には「あいかわ町民活動サポートセンター」があり、140近くの活動団体が登録しているが、そこには案内人みたいに自然関係の分野とかで固有の能力を持って活動されている方がいる。そこで、愛川町観光課とあいかわ町民活動サポートセンターが連携して案内人の募集に係る周知を行ったところ、若干応募が増えたという事例がある。

また、令和7年度の案内人会議と併せて行われた事例研修において、案内人同士の交

流を多く行うことができ、非常に良い体験であった。

(宮林議長)

案内人になりうる団体は相当いるので、案内人の役割が明確に浸透していくと、もっと広がっていくだろう。また、案内人同士の意見交換の場ができてくると、大きな成果につながると思う。

そういった案内人の集まる会議の場等で、下流域の団体とマッチングする機会をつくって、特にこれからは企業や学校等に問いかけながら、上流域は具体的に何をしてほしいのか。また、下流域も何を欲しているか。などについて共有していくと、わかりやすくなるのではないか。

子ども達向けの体験教室は、米田委員も実施されているのか。

(米田委員)

かながわの水源地域キャンペーンにおいて、やまなみグッズの愛川和紙細工の体験教室を実施した。1から作ると2～3時間かかるものなので、10分程度で完成できるようにほぼ完成形のものを使い、シール等で最後に加工する簡易な体験であったが、子ども達が非常に生き活きとして取り組んでくれて、完成するとばんざいする子どももいた。多くの子ども達が喜んでくれてよかった。

(宮林議長)

資料で報告のあったイベント参加者の満足度が高いのは、体験教室などを通じて、水源地域の自然環境や地域文化それに地域住民の人柄などが高く評価されているのだろう。

(岩澤委員)

「古民家カフェよってけさん」では、外部から来られたお客様に食を介しながら清川村の発信をしており、自分のところで作っている「瓶々プリン」及び「茶々プリン」が令和6年度にやまなみグッズとして新規認定された。認定されたことで、やまなみグッズややまなみ五湖についてお客様に話す機会が非常に増えたが、お客様は全くやまなみグッズの事を知らなければ、やまなみ五湖という言葉もピンと来ていない様子で、地図を見せる等の工夫をしているが、認知度が非常に低い。やまなみグッズ事業者の各店舗に、令和6年度に作った綺麗な観光パンフレットや四季折々のポスターなど紙媒体の広報物の配架があると、PRを行いやすい。宮ヶ瀬湖は知っているけれど、やまなみ五湖の他の4つはどこなのかとか、そういったレベルの話からスタートするので、簡潔にわかりやすく伝えられる冊子とか動画のようなものがあったら面白いのかなと思う。もしくは、そういった情報に繋がる二次元コードのシールを作成してもよいと思った。

(宮林議長)

宮ヶ瀬湖は有名であるが、宮ヶ瀬湖がやまなみ五湖の一つであることは知られていない。そういった状況がずっと続いていると思うので、今おっしゃられたような新しい仕組みを考えていけたらよいと思う。

(志村委員)

現在、宮ヶ瀬湖の水位が35mほど下がって昔の遺構が出ている。そのことがマスメディアに取り上げられたことにより、普段は冬場のそれほど人が来ない時期にもかかわらず、その遺構を見たいとあって、この前の3連休には結構な数の人が来ていた。水資源の大切さを体験するための、1つのきっかけになると思っている。

また、夏の期間の話だが、今まで来ていなかった若いカップルのお客さんが特定のスポットの写真撮影に来ていたので、理由を確認したところ、影響力のあるインフルエンサーが情報発信をしていた。他にも、8月24日放映のテレビ番組「メシドラ ～兼近&真之介のグルメドライブ」で宮ヶ瀬が紹介され、その中で若者に人気のある方がグラスライダーを滑ったこともあり、今までの親子連れとは客層と異なる若者が来ていたので、SNS等の影響力を感じたところである。

(宮林議長)

この冬は少雨の状況が続いており、水の問題への関心は相当高くなると思う。その中で、自然に関するスポット等がSNSで発信されると、スポット目当てのお客さんが来る。リアルタイムな発信が良いと思う。

(石田委員)

山北町では案内人が増えているが、案内人に応募したものの落選したという話を聞いたことがある。案内人に登録する際の基準やそのプロセスがわからないため、そのあたりが明確になるとよい。

また、周囲に案内人になれるような候補者が多くいるが、案内人に登録するメリットを説明できない。案内人に登録するとできることや、どのように水源地域に貢献できるかが一目で分かる資料があると、説明がしやすいと思う。

水源地域を学ぶ体験学習については、自身も関わっているが、令和7年度の参加学校が1校しかなかったのが残念であった。本取組を継続して実施している中で、ノウハウも蓄積出来ており、子どもに体験していただきたいと思えるプログラムを用意できていると思っているが、応募してくれる学校が少なかったということなので、応募が増えるような取組を考えていきたいと思っている。

(宮林議長)

案内人に登録するメリットを明確に伝える仕組みが考えられるとよいだろう。昔は案内人の所得が上がるような事業を考えていたが、そのような方向は難しい状況があるので、案内人自身の活動目的にインセンティブを与える仕組みを作る必要があるのではな

いか。

また、水源地域を学ぶ体験学習に参加したら、水源地学校みたいな証書を作っておいて、水源地域を知る人として学校の賞状がもらえる仕組みがあると、子ども達にとって、あるいは大人にとっても、ふるさとや水源地域を理解したというステータスになって賑わいが出てくるのではないか。

入江アドバイザーにもお手伝いいただきながら、ある村で塾を40年近く実施していて、以前は、卒業生に対して証書を渡していたが、やることが専門化してくるとどんどん難しいプログラムになっていってしまうので、遊び心がある楽な形として、卒業生に対してヘルメットや剪定鋏を渡すとかそういう仕組みにしたところ、その方が参加者には喜ばれ、その取得を目指すようになった。

水源地域においても、そういった仕組みが話題になると、参加者が増えるかもしれない。案内人の皆さんがプログラムを作って水源地学校のような仕組みを構築して、そのプログラムの修了者にプレゼントするような仕組みができると面白いのではないか。

(鷲尾委員)

案内人に登録するメリットについては、ステージが変わってきたという感じがする。同様の考えを持つ人と知り合うことができ仲間が増える、そこから新しいことが始まる、現場と一緒にいる機会が増えるということが、心を動かすんじゃないかと思う。言語化や仕組み作りは難しいかもしれないが、取組事例を集めて紹介すると、このような人々と仲間になれるというのが伝わりやすい。

また、先ほどのプログラムに参加してくれる学校がないという話があったが、相模原市のように水源地域に都市地域が入っているところもあるのだから、水源地域と都市地域の交流だけではなくて、清川村が愛川町のプログラムに参加するみたいな、水源地域同士の交流の形が出てきてもいいんじゃないかと考えている。実際、愛川町も清川村ももう田舎ではない。学校では子どもたちがパソコンを使いこなしている。水源地域内での交流を盛んにした上で、そこから交流を広げていって、茅ヶ崎市など海沿いの市町が参加したいと思えるようなものを作り上げていく。相模原市は、政令指定都市でありながら、市内に水源地域と都市地域の両方があるため、積極的に巻き込んでいけるとよい。

(宮林議長)

相模原市という政令指定都市内には、都市部もあれば農村部や山村部もあり、一つの流域のように考えられるため、市内での交流を構築できるとよい。

(野崎委員)

相模原市は合併して今の形になったが、相模原市内の旧津久井4町と中央区、南区では環境が異なるため、相模原市内の山間部と都市部の交流を深めていくのが大切であると考えている。

また、相模原市のまちづくりセンターは地域に根差した取組を行っており、まちづく

り区域が22地区存在する。まちづくりセンター同士での交流も大切にしていきたい。

(長田孝宏委員)

今の補足という意味で、相模原市では「第2次相模原市水とみどりの基本計画・生物多様性戦略」を策定しており、その中でこの事業に取り組み、進行管理をしている。

その他に、都市と自然環境に優れている津久井地区では、水源文化都市という一つの目的を掲げており、近隣の愛川町や清川村と協力しつつ、上下流域の自治体と連携しながら、水源地域について学んでもらうことが必要であると考えている。

(宮林議長)

「第2次相模原市水とみどりの基本計画・生物多様性戦略」を策定しているのは、この事業の推進とともに上流域のみどり保全という意味でもよいことである。他の市町村にも影響があるのではないか。

(長田孝仁委員代理)

山北町では川崎市と個別協定に基づいて独自に交流事業を行っており、今は協定の更新作業を進めているところ。このところの少雨の状況もあり、担当レベルの話ではあるが、川崎市とは連携して水源地域の大切さをPRしていきたいという話もしている。

また、案内人の登録メリットだけでなく、やまなみグッズの登録メリットを事業者に対して示せたらよいと考えている。例えば、独自にホームページを持っていない事業者に対しては、登録することで行政のホームページで商品をPRすることができ、インターネットで若い人にも見てもらうことができる、ということがメリットになるのではないか。

(宮林議長)

事業に参画することでどのような変化が起きてくるのか、PRが行われることで活動範囲が広がる流れが見える化できるとよい。多様な業者や機関が自主的にこの事業に参画できる工夫が必要と考える。

(上村委員)

愛川町としては、毎年、自治体間交流事業として都市部の方を愛川町に招いて、観光の主である体験教室を中心としたものを体験していただき、それを地域に持ち帰っていただき、改めて愛川町を来訪していただくことに繋がればよいと考えている。

また、町主催として関係機関と協力しながらイベントを開催し、都市地域との交流を図る取組を独自に行っている。

先ほどから話の出ているやまなみグッズのPR関係の話だと、愛川町でも「愛川ブランド」という独自の特産品の認定制度を行っており、一部の商品はやまなみグッズと重複して登録されている。今後、町主催のイベントにおいても、やまなみグッズとしての

側面も合わせてPRしていきたい。

(朝倉委員)

清川村においても、自治体間交流事業を毎年実施しており、道の駅 清川や宮ヶ瀬ダム周辺地域を案内し、水源地域としての清川村を知ってもらう取組を行っている。

また、清川村でも「きよかわブランド」という独自の特産品の認定制度を令和4年度から行っており、ちょうど昨日、今年度の認定審査会を行って新たに三品追加することになった。清川村内の事業者は少ないが、この取組の認知度を上げていくためにも制度を拡充していきたいと考えている。「きよかわブランド」も同様に、やまなみグッズと重複して登録されている商品もあるため、双方の認知度向上の取組を清川村も一緒に取組んでいく必要性を感じている。

他にも、教育委員会が所管している事業の中で、清川村と真鶴町の学校間交流を実施しており、双方の地域を訪れて宮ヶ瀬湖のカヌー体験や海の体験を行っている。

(宮林議長)

愛川町及び清川村において、独自の特産品の認定制度があるようだが、重複して登録している場合はやまなみグッズであることが分かるようになっているのか。

(朝倉委員)

登録されている事業者それぞれ周知を行ってもらっているが、どの商品が重複して登録されているかが分かるような広報は行っていない。

(宮林議長)

重複して登録している場合はやまなみグッズであることが分かるような広報を行うとよい。PRの強化やブランド化して商品の認知度が上がり、売れることが大切である。

(志村委員)

宮ヶ瀬ダム周辺振興財団の取組として、夏休み期間に親子連れを対象にした「サマーアカデミーみやがせ」という事業を実施している。相模原市、厚木市、愛川町、清川村の4市町村の全小学校に4万6千部の案内冊子を配布していて、この事業も3年目になる。小学校に冊子を配布することで、相模原市南区等のこれまで来訪が少なかった地域の方も来訪するようになった。また、今年から大学連携も始めて、スキャナーで読み込んだロボットで戦うものや、雲を作る実験などを実施して、親子連れに楽しんでもらっている。リピーターになる方もおり、教育現場と連携するとインパクトが大きい事業が実施できることを実感している。

(宮林議長)

近年、AIが急速に進化している中で、eラーニングやeスポーツなどが中高生や子

ども達をはじめ多くの人々の間で人気があり盛んになっている。やまなみ地域において、やまなみをテーマとするプログラムの開発による大学生と子ども達をマッチングした企画ができると面白いかもしれない。

現在、水源地域でこの事業に関連する様々なイベントなどが行われているようである。それは必ずしも事務局が把握できていないものも多いかもしれない。それを繋げる必要がある。例えば、ポータルサイト「神奈川やまなみ五湖navi」のイベントカレンダーに掲載して、地域内の各取組をつなげていけると来訪者とともに話題も増えて賑やかになるかと思う。

(入江アドバイザー)

今までの話を聞く中で、やまなみ五湖の認知度が低く、水源地域への理解促進が中々進まない等の課題がある中で、広報やPRの取組については、これからも大事なことで継続していければよいだろうと考えるが、一方で、子どもや一般の人々が認知した後に、そこでおしまいではなく、より理解してもらうためには体験することが必要である。体験することで理解が深まるので、既に現場では体験するプログラムを実施しているかとも思うが、より充実させていく必要がある。案内人の不足という課題もあるが、どんな体験プログラムを考えたらいいのかというと、やはり交流になる。都市との交流、流域連携としての交流もそうだが、多世代の交流を実施していくことが大切である。

例えば、先ほど宮林議長の話にあった神奈川水源地域学みたいなものを作り、案内人が各自の得意分野の先生となって食文化等を含めた多様な文化を学ぶことができるようにする。文化には能のような文化もあれば、食の文化、伝統文化、歴史生活文化、森の文化など様々な文化がある。その文化を学ぶにはやまなみ五湖だと大きすぎるので、また文化は地域ごとに異なることから、それぞれのエリアごとに分かれて、各湖の文化や4市町村ごとの文化としてコースを設定し、コースごとのキャンパスで体験交流プログラムを実施していくとよい。

さらに、体験交流プログラムの参加者の行動が都市生活の中でどのように変容したかモニタリングすると、見えてくるものがあるのではないか。

単体で実施されている体験事業を一つのプログラムでまとめるとストーリーが繋がるのではないか。

(宮林議長)

神奈川水源地域学のような大きな枠組の中で、やまなみ特有のカリキュラムや体験コースを作成して事業をつなげていくというのは面白いアイデアである。

神奈川水源地域学という名前は固い印象があるが、遊びも学問に含まれると考えている。人間の思考や知恵は、暮らしの中で、遊びを通して体験することで地域愛につながり、ひいては自分達の周りを豊かにするものであり、遊びは体験学として大切に、学問に繋がるという捉え方もできると思う。つまり水源地での様々な体験に遊び心を持たせると良い。

3 報告

「かながわ水源地域活性化計画」の改定内容について

「「かながわ水源地域活性化計画」の改定内容について（資料2）」により、事務局から説明した後、質疑応答を行った。

[質疑応答]

(宮林議長)

「かながわ水源地域活性化計画」の次期計画においては、現計画の基本的な方向性は変えずに、より取組内容を充実させていくということである。水源地域の活性化については、特にエリアごとの魅力を生かすことに力を入れる方向である。水源環境の理解促進については、水の作文コンクールに「賞」の追加等の取組により普及啓発に力をいれる方向性である。

また、大学生を巻き込んだ水源地域活動への参加促進を実施することで、交流人口より進んだ関係人口を創出する取組を実施するとしている。

さらに、自治体間交流事業においては、交通費の負担を行う予定であるとのことで、具体例を出しながらさらに進めていこうとのことである。何かご質問とか、こんな内容をいれてほしいなどご意見のある方はいますか。

(鷲尾委員)

次期計画は皆様の意見を取り入れて策定したとのことで、先ほどまで出ていた意見なども形として入っているようなので期待している。

特によいと思ったのが、ダムの歴史等動画作成についてで、県が水源地域にダムを作る際の歴史を忘れていないことを示すものであり、原点に立ち返る新規事業を行うのはとてもよい。

また、子ども体験交流事業の拡充において、学校の先生が忙しい中で、放課後児童クラブ等にも対象を広げるのはよい目の付け所である。

(宮林議長)

小学校4年生あるいはそれ以上の学年を対象にしている事業が多いが、小学生及び小学校の先生は学校教育の中で大変忙しいため現地まで出向くことは難しくなっている。そこでこれからは、幼児を対象に水源地域に来訪してもらう仕組みづくりができるとうよい。林野庁において、「こどもの森づくり」構想を推進している。幼児が来訪する際には祖父母や両親が手伝うため、家庭の中で山や水、農地などに関わる会話が生まれてくる。子どもと大人が山菜取りや栗拾いあるいは薪採集などで森や川と一緒に入り、そこで、危険な植物や昆虫、食すことのできる草花や木の実など色々なことを学ぶことができた。これが当たり前の昔の日本の里山文化ではなかったか。また、子どもたちが森に入ることによって様々な教育効果に関するエビデンスが明らかになってきたことから、これか

らは幼児までを含めて盛んに森に入ることを広げているところである。下流域や中流域の幼稚園を積極的に水源地に連れて行く手立てを考えてもいいのではないか。特に相模原市であれば市内に都市部と農村部・山村部が存在しているので実践が出来る。

(米田委員)

以前はやまなみグッズ事業者同士の交流が盛んであった。やまなみグッズを持ち寄って互いの商品を評価するような活動が一時行われていた。しかし、やまなみグッズ事業者の高齢化に伴って行動力が落ちていき、交流がなくなってしまった。

また、改定計画の概要の中にある「県民の水がめ」という言葉について、この言葉がどの程度使われているのかはわからないが、さんざん使っている「水源地域」という言葉よりも「県民の水がめ やまなみ五湖」という言葉がしっくりくと個人的には感じた。

(宮林議長)

元々、やまなみ五湖を作った時から、それがどれくらい認知されるのかは課題であった。やまなみ五湖の認知度を50%以上にしようという目標になっているが、非常に少ない認知度をどう向上させていくのかが次の計画でも課題だと思う。

一時はやまなみ五湖という言葉を使うのをやめてしまおうという話まであったくらいなので、あらゆるところでやまなみ五湖を使うか、「水源地域 やまなみ五湖」あるいは「県民の水がめ五湖」といった表現の工夫をしていかないと、なかなか認知度は上がっていかないのかなという感じがする。これは次期計画においても課題だと思う。

(石田委員)

質問をさせてほしい。水源環境保全税は、令和9年度以降も継続することになったが、「かながわ水源地域活性化計画」の取組に活用されているのか。

(事務局)

水源環境保全税の用途は、森林保全に限定されている。一方、「かながわ水源地域活性化計画」においては、森林保全だけでなく、水源地域の活性化や理解促進に取り組んでおり、水源環境保全税はほとんど活用していない。

(石田委員)

山仕事をしており、水源環境保全税の使い道に関心があり質問した。

次期計画で新規の取組を行うことはよいと思う。

普及啓発用の子ども向け漫画を新規に作成するという話だが、今まで作っていた「森は水のふるさと」のリーフレットの作成は継続するのか。

(事務局)

「森は水のふるさと」のリーフレットについて、令和8年度は漫画の作成が完了する年であるため、別に作成予定であるが、令和9年度以降については、作成した漫画の内容をふまえて統合するかどうか検討する。

(石田委員)

「森は水のふるさと」のリーフレットは、非常に使いやすかったため、上手く補完されるような漫画が作成されることを期待する。

(宮林議長)

「森は水のふるさと」のリーフレットにはキャラクター「かながわ しずくちゃん」が掲載されていたので、積極的に活用して知名度を上げるとよい。

水源環境保全税について、森林保全だけでなく、水源環境保全税によって整備された森林空間等を幼児教育にも利用することを目的に示せば、本計画でも活用できるのではないか。

森林に関わる関係省庁の中で、水源地域や山村を放置してはいけないという意識はあるが、具体的な対策が乏しいし、難しい。活性化しようとしても、高齢化による担い手不足で悩んでいる。

下流地域と新しい文化を作り上げていく（流域文化圏）と捉えて、水源地域を県の財産として、県が文化的、教育的、医療的、環境的など県民の暮らしのために総合的に活用して守っていくという姿勢を強く打ち出してはどうか。前回のフォローアップ会議では、水源の日を黒岩知事が指定して作ってみてはどうかという話もしたが、水源地域は県民の貴重な財産であることを、もっと強く計画の最初の方に記載してもいいのではないかと思う。

(岩澤委員)

やまなみグッズ発信強化の中で、パッケージデザイン及びウェブデザイン等のデザイン支援を行うとの説明があった。また、普及啓発用に漫画や動画を作るという話もあった。紙媒体の広報物も大切であると思うが、これだけスマートフォンが普及している中では簡単にカメラからアクセスできるので、水源地域の広報媒体に繋がる二次元コードを活用すれば簡単に情報を得られるようになる。安価なシール1枚で出来ることなので、そういったものを組み込んでくれると嬉しい。

(志村委員)

宮ヶ瀬地域は様々な支援をいただいていたが、次期計画でも「エリアごとの「魅力」を生かした活性化の取組」の大半が宮ヶ瀬地域に関係するようなので、感謝している。

(宮林議長)

宮ヶ瀬地域の活性化のために、宮ヶ瀬ダム周辺振興財団が地域の観光支援や地域振興

の柱（DMO）となって取り組んでほしい。

（長田孝宏委員）

体験交流事業が大切であると考えており、自然体験交流事業において、鳥居原ふれあいの館が中心となり、令和7年度より3事業追加して提出する予定である。

また、津久井地域の小学生を対象に、津久井が水源地域であることを知っているかとの調査を実施したところ、40%いかないくらいの認知度であったので、認知度の向上に向けた対策を講じているところである。そういったこともあり、やまなみ五湖の認知度についても継続的かつ重点的なPRが必要であると考えている。

自治体間交流事業については、藤沢市と連携して道志川で鮎の釣り体験や水質の検査体験等を実施した。親子約10組に参加いただき、参加者の感想で水源地域の水質の保全の重要性を理解したとの声があり、体験交流事業の必要性を実感している。

（野崎委員）

現行計画の課題として記載されているが、高齢化により地域の担い手が不足しており、都市地域の人々が水源地域に来訪して担い手になってもらえるような取組の推進を期待している。

次期計画のエリアごとの「魅力」を生かした活性化の取組において、「相模湖における地域主体の芸術・文化の取組支援」があげられている。相模湖地区・藤野地区は都心から電車で一時間というアクセスの良さがあるが、水源地域をじっくり楽しんでもいただくには宿泊を伴うことが必要かと思う。一方、宿泊施設の少なさの課題があるが、県の青少年課が藤野芸術の家の今後の取り扱いを検討していると聞いているので、連携して体験交流の取組を推進してほしい。

（長田孝仁委員代理）

水源地域活動への参加促進の取組において、令和8年度に大学生が山北町をインターンシップのような形で来訪し、体験交流の取組を通じて関係人口の創出を図る予定である。

これまでは小学生や幼稚園生といった子ども向けのイベントが多かったが、大学生は今後定住や就職に繋がる可能性があるため、そういった方たち向けに山北町の水源地域としての魅力を発信していきたい。

（上村委員）

ダムの歴史等動画作成において、やまなみ五湖完成以降、神奈川県は取水制限や給水制限をしていないことをPRできるとよいのではないかと。

動画が完成した際には、愛川町としても動画を活用してPRしていきたい。

（朝倉委員）

水源地域体験交流ツアーの実施について、将来的にはメニュー化して、実施側も商売として成立し、参加者は楽しんで学んでまた来たいと思うような事業になるとよい。自治体間交流事業も含めて、将来的には民間で自走化できるとよい。

(鷺尾委員)

個別の意見ヒアリングも大切であるが、皆様の意見を聞きながら議論するのも大切であると思うので、実務者レベルの部会については良い方向に進めていただきたい。

水源地域があるおかげで水道が止まっていないことをもっと広報していくとよいと思う。水道から飲める水が出てくるという状況を守るために、取組を続けてほしい。

(宮林議長)

委員の皆様は、次期計画に基づいてさらに頑張って取り組んでほしいという考えであると思う。

水源地域活性化推進協議会の体制を実践するように確立しながら、構成員と上手く連携してほしい。特に、こうした取り組みは地元の熱意とパワーが欠かせないので各部会に期待したい。

また、水源地域は防災の観点からも重要であることを踏まえた議論も必要であると思う。

(入江アドバイザー)

「森は水のふるさと」の話があったが、文化の源はやはり源流、水が湧くところが文化の源であると思う。そういった視点のもと、水源地域の文化や歴史があることを理解される取組を推進してほしい。

また、ストーリーが大切であり、リピーターに繋がる。人がなぜ旅をするのか、人はなぜ故郷に帰るのかと考えると、人と会って交流するためである。リピーターになってもらうためには、案内人や地域の人々がまた来たいと思ってもらえるようなおもてなしをして、あの人に会いたいから水源地域を訪れるというストーリーが必要である。人が人を寄せ付けるのであり、それが交流である。そのような観点をもって、水源地域の活性化や地域間連携を考えていく必要がある。

(宮林議長)

地域の活性化においては、故郷愛、地域愛の醸成が欠かせない。

委員の皆様意見を尊重しながら、次期計画を推進してほしい。

全国源流協議会の方で源流サミットを開催したとき、呼んでいた国会議員は2人くらいだったが、実際は9人も参加していただいた。国会議員の関心の高さから分かる通り、山村や水のことを政府も真剣に考えていると思う。

また、企業はこれまで環境貢献を意識した森づくりなどに関心があったが、今は地域の資源や文化に関心を示しており、地域づくりにも関心が高まっている。企業も一緒に

地域を活性化して、自社の故郷づくり、いわゆる自社や社員の故郷にしようということ
を盛んに考えてきている傾向がある。そうした企業とマッチングできるとやまなみグッ
ズややまなみの資源である木材の売り先の確保にもつながるし、教育に関心がある企業
も多い。したがって、下流域と上流域のマッチングの場面を設けるなど両者の対面での
意見交換の場を設けるなど、水源地域活性化推進協議会内で議論しながら、次期計画を
大きく進めてほしい。

4 その他

事務局からフォローアップ会議の今後のあり方と議事録の掲載時期及び要約の方法に
ついて、事務連絡を行った。

以上

i